早春

湿気を含んだ黒い雲と共に
なまぬるい春の嵐が
私に運んできたものは
ああ、何と毎年変わりばえのしないものか

べたつく酒が盃に注がれ
僕は見るともなく眺めている
女の身体からするりと落ちるバスタオルを
ああ、これもまた春か

後悔だけが私を歩かせる
先へ、とにかく先へ
同じ春、同じ風景が与えるはずの安らぎは
既に私には遠い

この指が何を命じていたか
何のために命じていたか
あの涼しい風
たおやかな眼差しの中で・・・

あの時は！
あの時は選ぶことができなかった———
あの時は・・・
・・・

(1989.4._)